

日本における鋼を使った刀の歴史は古く、一説によると朝鮮半島から製鉄法がもたらされた6世紀半ばには、献上品として製作されていたとされる。そんな日本刀の歴史を今に伝えているのが、東京都・葛飾区で刀鍛冶を営む吉原義人さんと息子の義一さん。彼らは現代の日本刀をどのように捉え、打ち続ける中で何を伝えたいと考えているのだろうか。

特集 カンカン カキン、刀鍛冶の旅 日本最古の鉄作りを今に伝える刀鍛冶

鉄を精製し、それを鍛造し、刀を生み出す刀鍛冶。
“刀の文化”を今に伝える伝道者たちは、その一振りに魂を込める。



日本刀はきっと武器ではなく その人を象徴するものだった

武器としての日本刀は使われていないと話す吉原親子。
彼らがそう話す理由は、日本刀の製造工程にあった。

刀 といえば、古今東西問わ
ずさまざまな物語でも
登場する最もメジャーな武器
の一つ。しかし、日本刀はただの
武器としてではなく、時には神
の象徴として、そして自身を表
すものとして発展してきた。現
代では美術品の一つとして国
内はもちろん、海外でも高く評
価されている。

「まず、日本刀は武器というの
が根本的に間違っているので
はないかと私は思います」と話
したのは義一さん。曰く、「日本
刀が戦いに登場したという記
録はあまり残されていません。
古来より武器ではなく、象徴
として存在したものであったの
ではないかと私は考えます」と彼
は話す。さらに、「日本刀は一本
作るのに一ヶ月ほどかかるこ
とも少なくありません。鉄を打
ち、形成し、研ぎ、鞘や鐔(つば)
を装飾して1本の日本刀にな
るわけです。そんなものが消耗
品である武器だとは考え難い。
恐らく戦場にあっても、刀は権
威の象徴として存在していた
のでしょ」と義人さん。テレ
ビの中で縦横無尽に振り回さ
れる日本刀が実は武器として
ほとんど使われていなくて、美
術品や象徴としての役割が大
きかったとは驚きの一言だ。



工場の三代目・吉原義人さん(左)と四代目となる義一さん(右)。
自宅に飾られている1940年ごろに作られた「現代刀匠人気大番附」(中)。そこには東の横綱として記載されている。



住宅地に響く槌の音、それもここでは日常の一つ

吉原さんの工房は、なんと、葛飾の住宅地のご真ん中にある。その光景はこの辺りにもさまざまな工房があった当時を想像させる。

鍛

治場といえはドラマの影響なのか、人里離れた場所にあるイメージがある。しかし吉原さんの工房は住宅地の中にあり、隣近所はごく普通の民家だった。そのことを聞いてみると、「この工房は私が建てたんですが、以前は準工業地帯だったので鉄工所を営んでいました。周りにはウチ以外にもたくさん職人さんがいましたね。今だと鍛冶場を作るとは難しいと思いますが、江戸時代のころはこの辺りも城下町だったので、きつともつと多くの刀鍛冶がいたんじゃないでしょうか」と義人さんは話す。もしかすると刀鍛冶は今でもその日常生活に直結しない職人だが、ひと昔前は市井の生活を支える職の一つだったのかもしれない。

そんなことを思いながら義人さんに案内されて工房へと向かうと、炉の火を起す義一さんがいた。いよいよこれから鉄を作る作業が始まるようだ。「鉄の生成方法は日本に伝わった頃からほとんど変わっていません。その製法を受け継ぐ日本刀だからこそ、これからも作り

続けるべきだと私たちは考えています」と義人さんは話す。

炉の前の義一さんは左手にふいごの取っ手を、右手に火かき棒を持ちながら、玉鋼に熱が均一に伝わるよう動かしている。火の色が青から赤に変わってしばらくすると、玉鋼からグツグツという音がなってきた。刀匠たちはこの現象を「沸かす」と表現する。玉鋼を沸かすことで不純物を取り除くわけだが、熱しすぎると鉄まで溶けてしまうため、高い練度は必要不可欠。刀匠たちは玉鋼の沸く音と火の色を見極めながら、最高の鉄を生成しているのだ。

真っ赤に熱せられた鉄が炉から取り出されると鍛冶場には張り詰めた空気が流れ出した。義一さんが鎚をカンカンと打ち鳴らすと、3人の弟子が大鎚を振り下ろし「鍛錬」が始まる。弾け飛ぶ火の粉を物ともしない彼らに、900年前から続くと言われる真の刀匠の姿を見ることができた。



初代 國家

義人さんの祖父・初代國家が作った短刀。1940年代初期に作られた優雅なこの短刀は、國家の作品では珍しい乱れのない刃文・直刃が採用されている。日本刀が持つ鋭さが際立った一本といえるだろう。



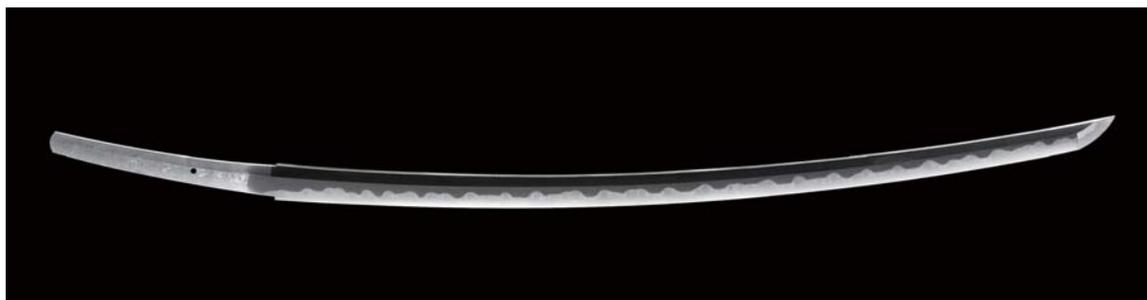
三代目 國家

義人さんの弟・吉原莊二さんが作った太刀。莊二さんは三代目「國家」として活躍している刀鍛冶で、初代は義人さんの祖父、二代目は義人さんの父親が襲名していた。鑄の近くまである波打つ刃文と反りに合わせて掘られた直線溝が特徴的。



義人

義人さんが手がけたこの“写し物”は、奈良の正倉院の倉庫に保存されている8世紀に誕生した日本刀。まっすぐな刃長と低い位置にある鑄が特徴的で、鑄地には雲を象った象眼が施されている。この力強さと繊細さが同居する刀は2009年の作品。



義一

義一さんによって作られた代表的な太刀。刀身のゆったりした幅と美しく湾曲する反り、そして重花丁字（じゅうかちょうじ）と呼ばれる華やかな刃文が特徴となっている。13世紀から伝わる備前刀のスタイルを踏襲して打たれた一本。



日本刀の良し悪しは 錬成する鉄で決まる

日本刀の美しさは刃文や鑄地に見られるが
それらは鉄の質が要となっている。

日本刀の刃文や鑄地の美しさは、世界でも類を見ないといわれている。特に刃文は、古代から伝わる鉄の生成技術と熟達した研ぎ師の技が合わさることで生み出された鉄の結晶が浮き出たもので、時々で変化する形も日本刀の魅力。しかし、その根本にあるのはやはり鉄造りにあると義人さんは話す。

「どんなに素晴らしい形を作っても、またどんな技術の高い研ぎ師に依頼しても、まずは鉄造りが上手くないと話になりません。美しい刃文は質の高い鉄からしか生まれませんからね。」

さらには「鉄が上手くできたかどうかは、出来上がって見ないとわからない。それも日本刀造りの難しいところですよ」と義一さん。未だ刀匠としての到達点に立っていないと話す二人は、美しいものを美しいと知るために日々勉強している。周りから名工といわれようとそこに執着しない二人だからこそ、名工になり得たのかも知れない。

そして新たな世代に日本刀の文化は受け継がれる

刀鍛冶の技術と日本刀の文化を次の代につなげるために
吉原さん親子は、今日も弟子とともに炉を吹き、鉄を打つ。

現

この工房には、6人の弟子が在籍している。吉原義人さんや義一さんをテレビなどで見て入門を決意した人や日本刀自身が好きで入門した人など動機はさまざまだが、美しい日本刀を一本でも多く打ちたいという想いは共通して持っている。そんな弟子たちに吉原さんたちはどんなことを教えているのだろうか。

「まず教えるのは鉄造り。これができるかどうか。どんな刀も生み出すことはできません。もちろん、日本刀を作る技術も教えませんが、それと同時に日本刀の美しさや魅力も伝えるようにしています」と義人さん。また義一さんは「日本刀の魅力の一つかもしれないませんが、日本刀は身を守る武器ではなく、心を守る武器だということを伝えるようにしています。美しい刃文も独特の鋭さも全てそれが根本にあるということを知ってもらいたいです」と話してくれた。

そんな彼らに弟子入りを願う人は年に数名いるという。実は引退する刀匠より、弟子入り志願者の方が多いというのが

現状だそう。その状況を好意的に受け止めるだけでなく、きちんと日本刀の啓蒙を行わなければいけないと二人は感じている。彼らがるべく多くのメディアに露出するようにしているのもそのため。武器ではなく宝物や美術品、そして自身を伝承する道具として愛されてきた日本刀を、彼らは作り手として今後も表現していくのだろう。

この旅で初めて目にした抜き身の日本刀は、背筋を凍らすような恐怖をまとっていた。それすらも芸術へと昇華する匠の技術が、未長く後世に受け継がれることを期待したい。

鉄を作る吉原義一さんの一挙手一投足を見逃さないよう、所作一つ一つをジッと見つめる弟子たち。槌を振り落とすたびに舞う火の粉は作業着を燃やすこともしばしばだが、彼らはそれに恐れることなく師匠の相槌に合わせ、また槌を振る。丹精込めて打ち込んだ鉄だけが、後世に語り継がれる日本刀になるということを若い弟子たちも知っているのだ。



今回の旅のメモ。

今回の旅で訪れたのはこちらです。

profile

日本刀鍛錬道場 吉原義人・義一

吉原義人:昭和18年生まれ。祖父の初代國家に師事し、刀鍛冶の道へ進む。昭和40年、文化庁認定刀匠となり、昭和47年の新作名刀展においては高松宮賞はじめ連続上位の特賞を総なめにする。20年に一度の「伊勢神宮の御神刀」に3度指名を受けたことでも有名。

吉原義一:昭和47年生まれ。父・義人の元で修行し、平成2年に文化庁より作刀を承認。平成5年から15年まで特賞を連続受賞し、史上最年少で無鑑査に認定された。現在、葛飾区指定無形文化財保持者。

[Facebook]

@yoshihara.yoshindo / @Swordsmithyoshihara



access

日本刀鍛錬道場まで

- [公共交通機関で] 羽田空港国内線ターミナルから京急空港線羽田空港国内線ターミナル駅へ。快特青磁行に乗りし、押上駅で京成押上線に乗り換え、京成高砂駅へ。駅から北へ徒歩約7分。
- [車で] 羽田空港国内線ターミナルから首都高速湾岸線を経由し、川崎浮島JCTを川崎・浮島出口・東京湾アクアライン・木更津方面へ。葛西JCTを東北道・常磐道方面に向かい、首都高速中央環状線を経由し、四つ木ICを出て四つ木方面へ。国道6号線を高砂方面へ。約60分

more information

吉原義人さん、義一さんに関わるあれこれ

home



日本刀鍛錬道場

初代吉原國家が開いた刀匠の工房。現在、三代目の吉原義人さんと四代目の吉原義一さんが受け継ぎ、日本刀文化を伝える場所としてさまざまなメディアでも取り上げられている。また現在も刀匠を目指す若い世代を受け入れ、刀鍛冶の技術と文化を伝承し続けている。

東京都葛飾区高砂8・17・12

☎03.3607.5255

[Facebook] 日本刀鍛錬道場 吉原

book



Art of the Japanese Sword The Craft of Swordmaking and its Appreciation

古来から美術品として高く評価される日本刀。本書では美しい名刀を紹介しながら歴史や作法、製法などを写真とともに解説している。また、現代の刀鍛冶の名工・吉原義人氏も著者として参加。英文のみだが、日本刀をより深く知るなら必ず持っておきたい一冊だ。

[出版社] Tuttle Publishing; Hardcover with Jacket版

[著者] 吉原義人、レオン・カップ、ヒロコ・カップ

[価格] 4,400円